山口県における裂織・紙布の分布

※松尾　優平

萩博物館では令和三年度春期特別展として「百年の布～美しき襤褸（ぼろ）の世界～」を開催した。本展は限られた衣料を最大限に活用する技術などを紹介し、地域に根付いた繊維原料の存在や、かつての衣生活を振り返るとともに、使い捨てが一般的になっている現在の衣生活を見直す機会の創出を目的とした。なお、本展題名の「百年の布」は、織り上げられた布が衣服に仕立てられてから雑巾やおしめなどに形を変えつつも、最終的にその役目を終えるまでに百年を超えるものがあったとされることによる。

本展では明治・大正年間ごろまで着用された萩及び近隣地域の仕事着を主要な資料とした。木綿が普及する以前に、気候などの自然環境に応じたその土地毎の風土に根付いた繊維原料の選択がなされていること、その結果として仕立てられた仕事着に地域性がみられること、また、地域によっては衣料の不足を補うための紡織技術が存在していたことに注目した。

以前より萩地域では古木綿布を利用した裂織、和紙から作られる紙布という特徴的な衣料が確認されている。本稿では市町村史誌や民俗調査の記述から萩地域及び山口県内におけるこれらの織布の分布状況を調査し、得られた情報の限りで分布図を作成した。この分布図には、前述の特別展を開催するにあたって実施した仕事着資料の調査結果を反映している。また、本稿では当館が収蔵する裂織の仕事着とその使用地域の情報について付加し報告する。

一　裂織

（一）裂織の概要

裂織とは細く裂いた古布に縒りをかけた太目の緯糸と、麻や木綿などの経糸を用いた布の織り方、またその織布や仕立てられた仕事着を指す。『佐田岬半島の仕事着：裂織』によれば、裂織は日本各地に分布していたが、特に日本海側沿岸部に集中しており、木綿の栽培に適さない寒冷地や北前船などによる古木綿布の流通があった地域で裂織が用いられていたとされる（愛媛県歴史文化博物館編「解題」『佐田岬半島の仕事着：裂織』四六頁）。一般的に裂織は裂いた布を織糸とするため生地が厚く、耐久性にも優れており、海行き・山行きの仕事着や防寒着として用いられていた。

山口県内の市町村史誌から衣生活に係わる記述を抜き出すと、木綿衣料について触れられたものは県下全域に多くみられ、仕立て方や入手経路、用いる生業や着用者の性別による形態の違いに至るまで細かに記録されている。しかし、裂織に係わる記述は、阿武郡などの一部地域にのみみられ、県下全域への広がりを見出せない。その上、裂織の用途や形態まで記録されている記述は極めて少ない。阿武郡において古布を用いた裂織が分布する理由としては、山口県の瀬戸内海に面する山陽側が木綿栽培の普及地であるのに対し、日本海に面する山陰側の木綿栽培はごく小規模であったことが少なからず影響していたことが考えられる。

萩地域では裂織の仕事着をツヅリ、またはツヅレと呼んでいた。これらの呼称は襤褸着の総称としての「綴れ」がそのまま衣服の呼称とされたと考えられ、古布を用いた裂織が襤褸着として認識されていたことを示している。なお、『萩市史　第三巻』では、ドンダをツヅレ（ツヅリ）の一種と記している（田中助一「こぼれ話」『萩市史　第三巻』三八二頁）。ドンダは漁撈や農耕に広く用いられていた仕事着で、裂織とは異なる製法で仕立てられる。着古した普段着に接ぎ当てを重ねて刺したもののほか、綿入れにして防寒着として用いることもあった。ドンダをツヅレの一種としているのは「綴れ」が襤褸の着物全般を意味するからであると考えられる。

（二）市町村史誌等にみえる裂織

『阿武郡志』によると、阿武郡の一部集落では木綿の衣服とツヅリを混用していたと記している。ツヅリは緯糸に裂いた古布を、経糸には麻糸を用いたものであったとされる（山口縣阿武郡教育會編『阿武郡志』一七四～一七五頁）。

『萩市誌』では、ツヅリを既に見られなくなった特殊な衣服として記している。緯糸に裂いた古布を用いた仕事着で、野良仕事や山仕事において着用したとされる（森田芳輔「衣食住」『萩市誌』五五二頁）。

『阿武町史 下巻』によれば、沿岸部の農業集落である奈古地区筒尾で、大正年間に仕事着や防寒着としてツヅリを用いていたとされる。緯糸は一センチメートル幅に裂いた木綿布、経糸は麻糸で仕立てたという（福永義晴「民俗調査」『阿武町史 下巻』六一九頁）。また、漁業集落の宇田地区元浦でも大正年間に防寒着としてツヅリを用いていたとされる。元浦では漁網に用いる麻糸の生産も行われており、ツヅリの経糸としても麻糸が用いられていたとされる（前掲書、六四二～六四三頁）。

また、当館が所蔵する「阿武町宇生賀の民俗」と題する手書きの報告書類に、昭和四四年（一九六九）三月九日に阿武町の宇生賀地区三和で行った聞き取り調査の内容が記されている。衣生活の記述によれば、冬場の仕事着として、主に男性がツヅリを用いていたとされる。使用年代の記載はない。経糸は麻糸、緯糸に木綿の布切れを綴ったものである。話者によっては「自作である」、「購入したものだったと思う」と食い違った記述もみられるが、製法や入手経路については明らかにされていない。なお、阿武郡におけるツヅリの購入に触れられた記述はこの他に見出すことができない。

以上によると、阿武町では木綿の衣類を使いつつも、凡そ大正末期ごろまではツヅリも仕事着として用いていたことが示されている。また、裂織の丈夫で風に強く暖かいという利点を活かして、主に冬場の防寒着としてツヅリを用いていたことも示されている。

『川上村誌』（昭和三九年刊）にもツヅレの記述がみられる。ツヅレは「綴れ織」を指す呼称であったとし、経糸は麻糸、緯糸は裂いた古布で仕立てたものを着用していたという。厚手で丈夫な布地が山仕事には都合が良いものであったとされる（波多放彩「村の衣食住」『川上村誌』二八九頁）。なお、『福栄村史』（昭和四一年刊）、『阿東町誌』（昭和四四年刊）にもツヅレの記述がみられるが、『川上村誌』と筆者が同一であり、衣生活についてはほとんど同様の内容となっている。三町村の広域に渡り同一の衣生活が存在したことは考えにくく、これらの記述は取扱いに注意を要する。

阿武郡川上村及び福栄村（両村とも現萩市）の衣生活については、昭和四三年から翌四四年（一九六八～一九六九）にも調査がなされている。阿武川ダム建設に伴う民俗資料緊急調査の報告書である『阿武川の民俗』によれば、江戸時代はツヅリを冬期の防寒着として用いており、緯糸は襤褸布、経糸は麻糸であったとされる（河野良輔ほか「衣」『阿武川の民俗』五〇頁）。明治以降の衣服にはツヅリの記載はなく、いつ頃まで用いられていたかも確認できず、調査時に採集された衣服の中にも裂織の類は見出せない。なお、『川上村史 資料編』にも同様の記述がみられる（石原啓司「衣・食・住」『川上村史 資料編』五八頁）。

阿武郡阿東町（現山口市）の裂織については『篠生村誌第一輯』に記述がみられる。村誌によれば、綿を求めることができない多くの家々でボロを綴って着ることがあったとされる（田中恒一「風俗慣習」『篠生村誌第一輯』一四四頁）。用途・形態については記されておらず、どのような衣服であったかは明らかではないが、襤褸布を綴って仕立てているところからみて裂織であった可能性を指摘できる。篠生村は昭和三〇年（一九五五）の合併により阿東町となっており、阿武郡阿東町の一部では少なくとも裂織が用いられていたと考えられ

る。

昭和三九年（一九六四）に山口県教育委員会が実施した山口県民俗資料緊急調査では県内の二三箇所が選定され、その内阿武郡では萩市大井土井、阿武郡須佐町（現萩市）須佐、阿武郡阿東町嘉年の三箇所で調査が行われている。衣生活に係わる項目をみると、県内二三箇所の調査地の中で裂織について確認できるのは萩市大井土井のみである。調査によれば、襤褸布を裂いて織ったものをツヅリと呼び、厚くて丈夫であったため木樵の際に着用したという。着用方法はジバン（肌着）やソギと呼ばれる巻袖の袷の上に、ツヅリを重ねて着ていたとされる（山田基彦「萩市大井土井部落の民俗資料」『萩市郷土博物館研究報告　第一号』四頁）。萩市大井土井におけるツヅリの使用年代について記録はない。また、ツヅリの形態も記されていないが、袖付きの袷の上から着用していたことから、いわゆるソデナシの形であったことが推察できる。

続いて阿武郡以外の地域における裂織の記述に触れたい。『錦町史』によれば、玖珂郡錦町（現岩国市）では経糸は麻、緯糸に襤褸布を用いたツヅレ織りが用いられていたとされる（宮田伊都美「村落の構成と生活」『錦町史』二三九～二四〇頁）。

また、玖珂郡美和町（現岩国市）では小瀬川弥栄ダムの建設に伴って昭和四七年から翌四八年（一九七二～一九七三）に民俗資料緊急調査が実施されており、同町北部で裂織を用いていたことが記録されている。経糸に麻糸または木綿糸、緯糸に襤褸布を用いたツヅレ織りであったとされる（蔵本隆博「衣と生活」『小瀬川弥栄ダム水没地域民俗資料緊急調査報告』四頁）。なお、同様の事例が『美和町史』にも記されている（宮田伊津美「農民の生活」『美和町史』二五五頁）。

玖珂郡美和町ではその後も昭和五二年（一九七七）に対象となる集落を広げて第二次調査が実施されている。その報告書となる『弥栄峡の民俗』ではツヅレ織りの製法についても記されている。経糸は木綿糸または麻糸で、一・五センチメートル巾に裂いた襤褸布に縒りをかけずそのまま緯糸として織っていたとされる。当地ではボロツヅリと呼ばれ、山着のほか、帯や脚絆に用いていたとされる（河済敏子ほか「一　衣飾」『弥栄峡の民俗』五七頁）。これらの記述により山口県内では阿武郡のほか、玖珂郡においても裂織が仕事着として用いられていたことが確認できる。

（三）収蔵資料の概要

市町村史誌などにより阿武郡に広く分布していたことが確認される裂織ではあるが残存する資料は極めて少ない。萩博物館が収蔵している裂織の仕事着は三点のみであり、採集地は萩市相島と阿武郡福栄村の二地域に限られている。萩地域における裂織の地域的特徴を示すには資料数が乏しいため、ここでは資料の採集地・材質・形態・用途について記す。

・相島の裂織

相島は萩市の沖合北西約十四キロメートルに位置する島である。『萩市史　第二巻』によれば、江戸時代より畑作による農業が盛んな地域であったが、採貝・採藻なども小規模な漁業も営まれていたとされる（田中克己「近世の六島」『萩市史　第二巻』一一〇四～一一〇七頁）。昭和においても畑作が産業の中心を担っており、この頃の主要農産物は除虫菊、裸麦、西瓜であった。除虫菊は昭和五二年（一九七七）に作付けを終え、葉煙草の栽培へと切り替わっていった。この他、生白藷（サツマイモ）や夏柑（ナツミカン）など種々の栽培がなされていた（萩高等学校社会部編「農業生活」『萩市相島の調査報告』九～一一頁）。しかし、綿や麻などの繊維植物の栽培に係わる記録は見当たらず、島内における生産は殆どなされなかったようである。

当館が収蔵する相島の裂織は二点、どちらとも上衣である。相島では裂織の仕事着をツヅリと呼んでいた。昭和四〇年（一九六五）ごろまで着用していたとされる。阿武郡における裂織の使用年代は、明らかになっている地域では凡そ大正末期ごろまでと記録されており、それらと比較すると相島は阿武郡内で最も遅くまで裂織を着用していた地域であったと考えられる。本土域に比べると島嶼部における衣料調達が厳しい状況にあったことが影響していると推察できる。島民への聞き取りによれば、嫁入りの際に裂織の仕事着を仕立て、そのツヅリを繕いながら生涯着続けたという。なお、収蔵資料の二点とも着用者の性別は記録に残っていない。

館蔵資料の外観は写真1～2のとおり。材質・形態・寸法は全体的に類似している。どちらも経糸に白の木綿糸、緯糸に白地及び絣などの藍染の木綿布を用いている。生地の厚さは二～三ミリ程度。白地と紺地の裂き布を二本毎交互に織り込んでおり、身頃に細かな横縞模様を形成している。袖は巻袖、身頃と同様の裂織を縫い付けている。掛け衿、袖覆輪には絣が用いられている。裾に覆輪はなく、二センチメートルほど木綿地の仕舞を折り込んで縫い合わせている。衿から背中にかけて紺地の木綿布を当て布として縫い付けている。使用痕や破損部はほとんどなく、補修の形跡もないため当該資料二点はともに長期間に渡って用いられていたものではないと考えられる。

昭和四〇年（一九六五）に福岡県立戸畑中央高校郷土部が相島で実施した聞き取り調査によれば、相島にはツヅリと呼ばれる雨具があったとされる。雨具のツヅリは二センチメートルほどの厚みがあり、生地に水が滲み込みにくかったという（宮崎美紀子「習俗」『相島』七四頁）。収蔵資料の二点とは形態が大きく異なっており、ツヅレには裂織とは材質、または仕立て方の異なるものが存在したと考えられるが、残存する資料には辿り着いていない。

・福栄村の裂織

阿武郡福栄村は四方を急峻な山に囲まれており、平坦な耕地が限られたため傾斜地を耕起した棚田が多数みられる。『防長風土注進案』によると、阿武郡福栄村域にあたる福井下村・福井上村・紫福村（昭和三〇年四月一日、福井下村、福井上村の両村域を含む福川村、紫福村が合併し福栄村となる）の三つの村では米・麦・雑穀のほか蔬菜・葉煙草、楮および和紙が産品の中心であった。繊維原料としては麻が生産されていたが、生産量は少なく小規模なものであった。また、村内には少数ではあるが木綿商や綿屋がいたことが確認できる。

当館が収蔵する福栄村の裂織は一点で、資料名はツヅレと記録されている。採集地は山口県阿武郡福栄村大字福井とあるが村内に福井という字名はなく、福井下または福井上のどちらかの地域で採集されたものと考えられる。採集時期は昭和三四年（一九五九）であるが、当該資料がいつごろまで着用されていたかは記録に残っていない。男性が着用し、常用着や農耕用の作業着として用いられていたとされる。

材質は、経糸は麻糸、緯糸は紺地の木綿布である。写真3のとおり、緯糸の濃淡によって横縞模様を形成しているが、全体的には色味の近い木綿布を用いている。袖は巻袖、身頃と同様の裂織を縫い付けている。袖及び衿の覆輪は黒地木綿布、部分的に紫色の木綿布が重ねてある。背中の当て布は縫い付けていない。袖覆輪にほつれが生じているが、全体的に使用痕は少ない。腹回りの帯の擦れ跡や、肩部・背部の使用痕もほとんどみられない。

（四）山口県における裂織の分布

山口県下における裂織の分布図（図1）は、前述の市町村史誌などの記述のほか、当館が実施した資料調査において裂織の仕事着が確認された地域を反映して作成した。なお、分布図には平成一五年（二〇〇三）以前の自治体区分を

用いている。

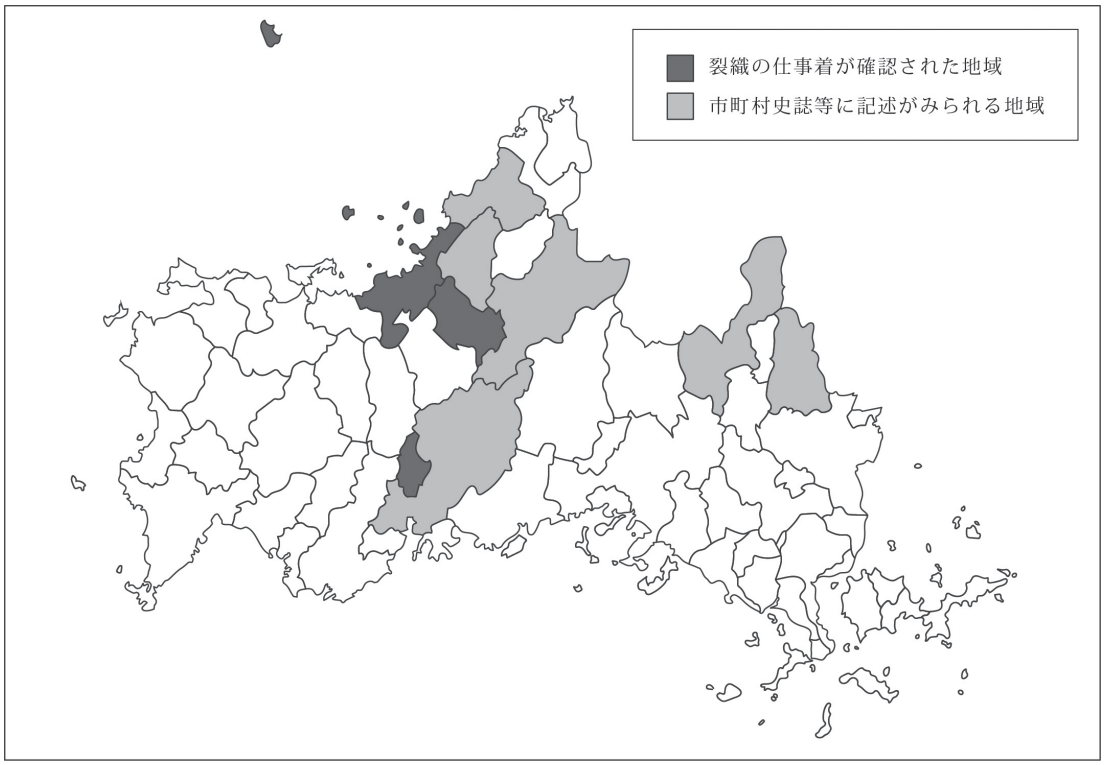

図１　山口県における裂織の分布図
作図：山田愛子（萩博物館）

山口県下で新たに確認できた裂織の仕事着は山口市立小郡文化資料館に収蔵されるソデナシ一点のみであった。吉敷郡小郡町（現山口市）周辺は藩政時代における県内有数の綿作地帯であり、当該地の木綿は「小郡木綿」と称された。このソデナシはかつて吉敷郡小郡町で着用されていたものとされ、大規模な木綿栽培地帯における貴重な裂織の着用例として注目したい。

加えて、裂織に関連する資料として山口市歴史民俗資料館に収蔵される裂き布及び木綿糸について触れたい。裂き布は絣を約一センチメートル幅に裂いたもので、木綿糸は濃紺と浅葱の二種類あり、糸の太さはほぼ同一である。裂き布と木綿糸はそれぞれ玉状に丸めてまとめられている。これらは山口市嘉川の民家に取り置かれていたとされる。当該資料に係わる情報は採集地のみのため、凡その年代やどのような用途であったかは明らかになっていない。裂織の緯糸・経糸として用いられる材料が同一箇所に保管されていただけでは判断し難いが、前述のとおり吉敷郡内で用いられた裂織が確認されていることを踏まえると、山口市嘉川周辺において裂織の使用があった可能性を指摘できるものと考えられる。

二　紙布

（一）紙布の概要

紙布は、植物の採取や栽培によって衣料とするものとは異なり、和紙の副次的な利用によって生産される織布である。紙の上下両端に余白を残し、連続するコの字状に切った紙に縒りをかけることで糸状に加工したものを材料として生産される。『防長風土注進案』においても、その名前をみることができ、藩政時代には既に用いられていたことが示されている。『日本民俗地図Ⅷ―衣生活―』によれば、紙布は紙紬とも呼ばれており、島根県西部の石見地方などで用いられていたとされる。（文化庁編『日本民俗地図Ⅷ―衣生活―』二頁）。

石見地方は石州半紙で知られるとおり紙漉きが盛んであったことから、紙布は和紙の生産地域において用いられていたと推察される。

一般に麻などの植物を繊維として利用する場合は、繊維質を傷つけないように取り出す手法が用いられる。和紙原料の楮から繊維を取り出すことができない訳ではなく、四国地方などでは楮の繊維を用いて生産される太布という織布も存在する（前掲書、二頁）。繊維をそのまま取り出さず、紙を漉くために一度砕いた繊維を織布の原料として再び用いている点も紙布の特徴として指摘できる。

（二）『防長風土注進案』における紙布

『防長風土注進案』によると、藩政時代の請紙制度によって半紙等の生産と納入が割り当てられた阿武郡の山間部では紙漉きを冬から春にかけての主産業としており、併せて農民は漉いた半紙を用いて紙布を織っていたことを見出すことができる。以下は、阿武郡須佐町域にあたる奥阿武宰判彌富村の記述である。

「一産業　半紙漉立八百五拾九丸程

但御藏入紙屋軒八拾軒、冬春百日の間板立ニメ上手下手且手間の多少押平均一軒一船漉三丸半の掠量にして貳百八拾丸位、右之内上納紙百丸位、外ニ諸村受合漉百貳拾丸位、給領漉立凡五百七拾九丸ほと、右之内御給主へ上納紙四百貳拾四丸程、殘り漉延凡百九拾五丸ほと、此内紙布着料軒別四反位の抨にして家數四百貳拾五軒分千七百反、壹反ニ付貳束織にして此紙丸にして五拾六丸餘、地下役座其外遣ひ紙障子紙等に入用之分凡貳拾丸程、殘り百拾九丸醤油塩油其外品替の爲須佐へ持出申候掠量ニ御座候事」

彌富村では漉いた紙の一部から、一軒あたり四反として、村内四二五軒分の一七〇〇反を紙布着料としていたと記されている。紙布一反につき半紙二束（一束＝二〇〇枚）を要するとしており、一軒あたり紙布四反で半紙一六〇〇枚を用いていたこととなる。村内全体では半紙五拾六丸（一丸＝六〇束、一二〇〇〇枚）となったとあり、単純計算で半紙六七二〇〇〇枚が紙布として用いられていたことになる。

彌富村のほか、奥阿武宰判では阿武郡須佐町域にあたる鈴野川村、阿武郡田万川町（現萩市）域にあたる小川村、田萬村に紙布の記述があり、紙漉が行われていた両町の山間部一帯で紙布が用いられたことが示されている。これらの地域が半紙を衣料としていた背景には木綿などを容易に入手することができず、衣料の確保が困難であったことが考えられる。

当時の庶民生活の様相を示すものとして、鈴野川村の風俗に関して以下の記述がある。

「且又衣類は寒中とても綿入なと着候者は鮮く、紙漉業營候ゆゑ紙つむきを織て常の衣類に仕り居申候邊鄙山家の行形にて御座候事」

冬場でも綿入れの衣服を着ることができる人は少なかったことが記されており、紙漉きを行っていた地域における衣料不足の様相を読み取り得る。不足する衣料を補うための織布として、当地の産品である和紙（半紙）を用いた紙布が織られるようになったことが推察できる。

『防長風土注進案』にみえる紙布の記述は奥阿武宰判内がほとんどであるが、藩領内の紙漉きが盛んであった地域の中で、前山代宰判廣瀬村に以下の記述がある。

「一諸産業之物品賣捌銀高之事（中略）

但諸上納銀（中略）

同貳拾七貫九百六拾五匁

但惣人數貳千六百四拾三人、上中下三段仕分にして、上分人數三百廿人老幼之無差別着用之木綿凡人別貳反宛ニメ六百四拾反、凡反別拾五匁宛ニメ九貫

六百目、中分人數四百五拾人古手買得着用殘紙布壹反宛ニメ四百五拾反、壹反に付十匁宛ニメ四貫五百目、古手四拾五枚買得代銀壹枚ニ付凡拾匁宛ニメ四貫五百目、下分人數千八百四拾三人、凡人別五匁宛ニメ九貫三百六拾五匁共ニ以上右之辻」

上納銀に当たる記述の中に紙布をみることができる。しかし、これは村内の衣料としても用いられたものではなく、他方への売り払いなどがあったものと考えられる。前山代宰判の中でもこのような記述が見られるのは廣瀬村のみであり、紙漉きの盛んであった奥山代宰判、徳地宰判に属した他の村落の記述には、紙布を見出すことができない。

（三）市町村史誌等にみえる紙布

前述したように『防長風土注進案』には藩政時代に奥阿武宰判、すなわち阿武郡の一部地域で紙布が用いられていたことが示されている。ここでは明治以降における紙布の分布や、その用途・形態について山口県内の市町村史誌にみえる記述を抽出する。

『阿武郡誌』によれば、奥阿武地方で紙布を用いていたとされる。また、材質が硬く見た目は麻布に似ており「木をよじり、いばらを押しのける」ような織布だったとされる（山口縣阿武郡教育會編『阿武郡志』一七五頁）。

『阿東町誌』によれば、紙布は紙紬とも呼ばれ、経糸に木綿糸または麻糸、緯糸に紙縒りを用いて織ったとされる。また、織り上げた紙布を柿渋に浸すことで夏冬を通じて使いやすくなったという（波多放彩「町の衣食住」『阿東町誌』五六九～五七〇頁）。

『須佐町誌』によると、紙布を柿渋に浸すのは耐久性を高めるためであったとされる（堀勇「庶民の生活」『須佐町誌』七六九頁）。『須佐町誌』におけるその他の紙布に関する記述は前述の『阿東町誌』を引用するに留まっている。

『田万川町史』によると、同町上小川地区の紙漉農家に紬用和紙の製造に関する資料があったとされ、この紬用和紙が紙布の材料として漉かれていた可能性があるとしている。また、同町中小川地区では紙布の工場生産を試みた記録があり、昭和二〇年（一九四五）以降に地区内に紬織工場を建設し、楮蒸しから紙漉、製糸、機織までを行い紙布を生産していたとされる。しかし、生産した紙布の利用価値に問題があったことから倒産に至ったと記されている。（田万川町史編さん委員会「産業の発展」『田万川町史』五〇五～五〇六頁）。なお、この紬織工場で生産された紙布がどのようなものであったかは、現在のところ関連資料を見出せていない。

このほか、『阿武川の民俗』によると、阿武郡福栄村佐々連では麻と紙を用いた紙コ（カミコ）と呼ばれる織布が用いられていたとされる。佐々連は周辺地区の中でも特に紙漉きが盛んな地区であった（河野良輔ほか「衣」『阿武川の民俗』五〇頁）。なお、佐々連は阿武川ダムの建設に伴って水没した地区のひとつである。

玖珂郡においても紙布の記述がみられる。『錦町史』によると紙をこよりにして織ったものがあり、膝丈までの短い着物にしたとされる。また、紙布には紙と麻を用いて織ったものもあったとされる。藩政時代には出奔した農民が紙布のコシギリ（腰丈の仕事着）を所有していた記録が残っている（宮田伊都美「村落の構成と生活」『錦町史』二三九～二四〇頁）。

同じく玖珂郡の『美和町史』によれば、紙を紙縒りにして織った紙布または紙子と呼ばれるものがあり、紙二束で紙つむぎ一反を織ったとされる（宮田伊津美「農民の生活」『美和町史』二五五頁）。

また、『弥栄峡の民俗』では、紙ツヅリと呼ばれる織布があり、経糸に麻糸または木綿糸、緯糸に一・五センチメートル巾に裂いた紙を用いて紙ツヅリを織ったとされる。同地域で織られたボロツヅリと同様に、紙を緯糸とする場合

も縒りをかけなかったという（河済敏子ほか「一　衣飾」『弥栄峡の民俗』五七頁）。

このほか『防長造紙史研究』によれば、玖珂郡内の美和町域にあたる秋中村・賀見畑村、錦町域にあたる深須村、このほか本郷村（現岩国市）においてユキバカマ（雪袴）と呼ばれる股引のような下衣に紙布を用いていたとされる（御薗生翁甫『防長造紙史研究』七八七～七八八頁）。

なお、『鹿野町誌』によれば、都濃郡鹿野町（現周南市）では藩政時代に紙布が用いられていたと考えられるとしている（瀬田静香「鹿野の民俗」『鹿野町誌』九四四～九四五頁）。『鹿野町誌』では紙布が用いられた記録等は示されておらず残存する資料も確認されていないため、製法や形態・用途など鹿野町における紙布の姿は明らかになっていない。

（四）山口県内における紙布の分布

山口県下における紙布の分布図（図2）を、前章と同様に市町村史誌等の記述を基に、『日本民俗地図Ⅷ　―衣生活―』（昭和五七年刊）の記載に生産・使用を確認できる地域を追加して作成した。今回の資料調査では山口県内における紙布に類する資料を確認することができなかった。

なお、武蔵野美術大学民俗収蔵室のデジタルアーカイブを参照したところ、阿武郡川上村及び福栄村で採集された紙布が収蔵されていることが確認されたため、当該二村を分布地域として追記している。

以上のように史料や市町村史誌などによると、山口県内における紙布は阿武郡、玖珂郡などの限られた地域に偏って分布していることが見えてくる。これは紙布が紙漉きという産業に依拠して生産されたという地域的な特色を顕著に表している。また、紙布の分布地の多くが、裂織の分布地と重複していることも読み取れる。これらの重複する地域は木綿栽培が盛んでない地域であることから、山口県内においては裂織・紙布といった織布が木綿衣料の不足する地域で織られたものであったことが推察される。

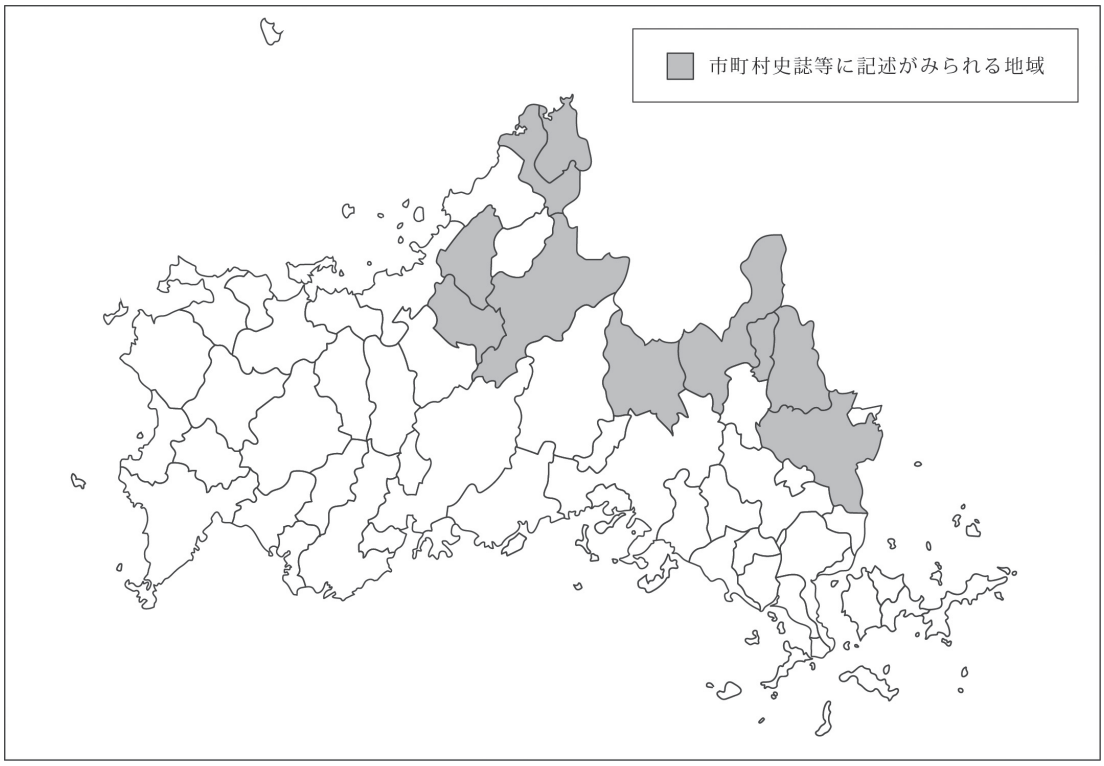

図２　山口県における紙布の分布図
作図：山田愛子（萩博物館）

三　今後の課題

本稿では裂織と紙布にのみ言及しているが、『防長風土注進案』にその名前を見ることができる織布として、フジの蔓を繊維原料とした藤布がある。かつては山口県内で生産がなされていた布であるが、今回は県内における藤布に係わる記述を諸資料から十分に見出すことができなかった。藤布のほか、ごくわずかな生産に留まったと思われる織布について今後も調査を進めたい。

また、本稿における裂織・紙布の調査箇所は限定的なものであり、今後の調査により新たな分布地が確認される可能性は十分にあるものと考えられる。昭和三九年（一九六四）に実施された民俗資料緊急調査のほか、昭和四九から翌五〇年（一九七四～一九七五）にも山口県教育委員会が山口県緊急民俗文化財分布調査を実施しているが、その報告書である『山口県民俗地図』（昭和五一年刊）からは裂織・紙布の存在を見出すことができなかった。今後は当該調査の調査票の内容を基に、その結果を含めた分布図の作成を進めることとする。なお、この度の特別展開催に係る資料調査では、近隣の島根県・広島県に裂織・紙布の資料を確認している。今後は日本海沿岸部から中国山地西端部まで含めた山口県及び近隣他県を含めた広域における分布状況の調査・解析を進め、改めて報告する機会を持ちたい。

〈引用参考資料〉

石原啓司　二〇〇〇「衣・食・住」川上村史編集委員会編『川上村史　資料編』川上村、五八頁

愛媛県歴史文化博物館編　一九九九「解題」『佐田岬半島の仕事着：裂織』愛媛県歴史文化博物館、四六頁

河済敏子・古城良子　一九七九「一　衣飾」名勝弥栄峡総合学術調査団編『弥栄峡の民俗』名勝弥栄峡総合学術調査団、五七頁

河野良輔・石原啓司　一九七〇「衣」山口県教育庁社会教育課編『阿武川の民俗』山口県教育委員会、五〇頁

蔵本隆博　一九七四「衣と生活」『小瀬川弥栄ダム水没地域民俗資料緊急調査報告』山口県教育委員会、四頁

瀬田静香　一九九一「鹿野の民俗」鹿野町誌編纂委員会編『鹿野町誌』鹿野町、九四四～九四五頁

田中克己　一九八九「近世の六島」萩市史編纂委員会編『萩市史　第二巻』萩市、一一〇四～一一〇七頁

田中助一　一九八七「こぼれ話」萩市史編纂委員会編『萩市史　第三巻』萩市、三八二頁

田中恒一　一九五三「風俗慣習」『篠生村誌第一輯』篠生村誌編纂委員会、一四四頁

田万川町史編さん委員会編　一九九九「産業の発達」『田万川町史』田万川町、五〇五～五〇六頁

萩高等学校社会部編　一九六四「農業生活」『萩市相島の調査報告』萩高等学校社会部、九～一一頁

波多放彩　一九六四「村の衣食住」『川上村誌』川上村公民館、二八九頁

波多放彩　一九七〇「町の衣食住」『阿東町誌』阿東町、五六九～五七〇頁

福永義晴　二〇〇〇「民俗調査」阿武町史編さん委員会編『阿武町史　下巻』阿武町、六一九～六二〇・六四二～六四三頁

文化庁編　一九八二『日本民俗地図Ⅷ―衣生活―』国土地理協会、二・三九五～三九六・四〇四頁

堀勇　一九九三「庶民の生活」須佐町誌編集委員会編『須佐町誌』須佐町、七六八～七六九頁

御薗生翁甫　一九七四『防長造紙史研究』マツノ書店、七八七～七八八頁

宮崎美紀子　一九六五「習俗」三宅英利編『相島』福岡県立戸畑中央高校郷土部、七四頁
宮田伊津美　一九八五「農民の生活」美和町編『美和町史』美和町、二五五頁
宮田伊都美　一九八八「村落の構成と生活」錦町史編さん委員会編『錦町史』錦町、二三九～二四〇頁
森田芳輔　一九五九「衣食住」萩市誌編纂委員会編『萩市誌』萩市役所、五五二頁
山口縣阿武郡教育會編　一九二四「風俗習慣」『阿武郡志』山口縣阿武郡教育會、一七四～一七五頁
山口県文書館編　一九六二『防長風土注進案　第四巻　前山代宰判』山口県立山口図書館、一九頁
山口県文書館編　一九六四『防長風土注進案　第二二巻　奥阿武宰判』山口県立山口図書館、九九・一一四・一三六・一六七・三六五頁
山田基彦　一九六七「萩市大井土井部落の民俗資料」『萩市郷土博物館研究報告　第一号』萩市郷土博物館、四頁

※まつお　ゆうへい　萩博物館学芸員

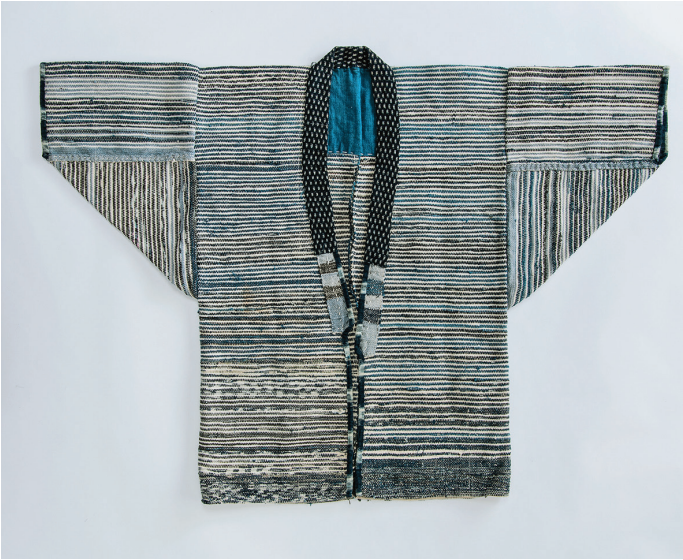

写真１　相島の裂織（ツヅリ）

写真２　相島の裂織（ツヅリ）

写真３　福栄村の裂織（ツヅレ）